

第13号を出すことが出来た。学術雑誌を出す醍醐味は、新資料と素晴らしい論文を世に出す喜びだ。その意味で今号は、発行者として心から喜ぶ出来になっている。

「特集1：新発見資料 差別はなかった！朝鮮人戦時労働者の個別賃金表」は、長谷亮介研究員のこの間の朝鮮人戦時労働に関する研究の大きな成果と言える。2022年に長谷研究員が北海道博物館で日曹天塩炭鉱関連資料の中に、朝鮮人労働者の個別賃金表「稼働成績並賃金収支明細表」を発見したのだ。

1944年5月分から1945年6月分までの14ヶ月分の官斡旋と徴用で動員された朝鮮人労働者の個別賃金表で、記載されていた朝鮮人労働者の総数は159名だった。労働者を送り出した面（日本で言う村）の行政責任者である面長に、毎月の労働者個別の収入、支出、任意貯金、送金状況を炭鉱の事業所が整理して伝える文書の控えだったのだが、そこから毎月の賃金収入だけでなく、任意貯金や家族への送金などについての金額が、一人一人について分かるのだ。

詳しくは長谷論文を読んでほしいが、この資料によって朝鮮人労働者が賃金差別を受けていたという通説は破綻したといえる。長谷論文によると、奴隷労働を主張していた左派学者もこの資料の存在に気づいていたが、あえてその内容を取り上げることがしなかった。彼らの学問的不誠実さがここに現れている。

もう一つ、今号で発行者として喜んでいることは、筒井正夫教授の力作論文を掲載できたことだ。

戦後の日本の経済史学会を長く支配した二人の巨頭学者、山田盛太郎と大塚久雄の歴史認識について、筒井氏が快刀乱麻を断つかのごとく鋭く批判するこの論文を読みながら、私は「そうだったのか」と何回も教

えられ、「その通り」と、やはり何回も膝を打った。素晴らしい論文をご寄稿下さった筒井氏に、心から感謝いたします。

特集2では、歴認研の訪韓報告を行った。韓国でも今、激しい歴史認識をめぐる戦いが展開している。今回の訪韓で、私たちは「反日種族主義」の執筆者の一人である鄭安基先生から、朝鮮人志願兵について講演をお聞きし、強い感銘を受けた。

そこで鄭先生をお招きして、10月28日東京で、29日大阪で公開講演会を開くことにした。詳しいことは同封したチラシを見て欲しい。多くの方のご参加をお待ちしています。（西岡）

佐渡鉱山の世界遺産登録をめぐり、今秋にもイコモス（ユネスコの諮問機関）が現地調査入りすると伝えられているが、歴認研では韓国の李承晩学堂と共同で5月23日、「佐渡金山は強制連行・強制労働の現場ではない」という声明文を作成し、5月23日にユネスコ事務局に提出した。

詳しくは本誌掲載の声明文をご覧ください。佐渡金山の世界遺産登録に反対する左派ではなく、日韓の保守派同士が連携してこうした共同声明を発表するのは、初めてのことであるまいか。それ自体、歴史的意義のあることだと思う。（勝岡）

歴史認識問題研究

（年2回発行）

第13号（令和5年秋冬号）

発行日：2023年9月21日

発行人：西岡 力

編集人：勝岡 寛次

編集部：歴史認識問題研究会

頒 価：1,000円

発行所：〒277-0065 柏市光ヶ丘2丁目1番1号

公益財団法人モラロジー道徳教育財団

西岡 力 研究室

Tel：04-7173-3197 Fax：04-7173-3199

印刷所：株式会社 長正社